



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	対照言語学的観点からみた相対テンスについて : 日本語及びアルタイ諸言語における形動詞を用いた従属節の分析
Author(s)	風間, 伸次郎
Citation	北方言語研究, 3, 175-199
Issue Date	2013-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52608
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_KAZAMA.pdf



対照言語学的観点からみた相対テンスについて
—日本語及びアルタイ諸言語における形動詞を用いた従属節の分析—

風 間 伸 次 郎
(東京外国語大学)

0. はじめに

現代日本語において動詞の終止形と連体形は同じ形をとる。したがって非過去のル形および過去のタ形は従属節における時制を示すのにも用いられる ((1)a~(2)b)。

このように終止形においてテンスで対立する形式は、時を示す従属節¹中などにも用いられるが、それらは発話時を基準としたテンス (絶対テンス) を示さず、主節の行為の時との時間的な前後関係のみを示すことがある。これは**相対テンス**と呼ばれている。

(1)a ロシアに行く時に帽子を買った

[文全体のテンスは過去、従属節 (副詞節) 中には非過去形]

(1)b ロシアに行った時に帽子を買った

[文全体のテンスは過去、従属節 (副詞節) 中には過去形]

(2)a 名前を書く紙を持って来てください

[文全体のテンスは未来、従属節 (連体節) 中には非過去形]

(2)b 名前を書いた紙を持って来てください

[文全体のテンスは未来、従属節 (連体節) 中には過去形]

したがって主節のできごとが過去のことでも、その従属節中にル形 (非過去形) が現れる一方 ((1)a)、主節のできごとが未来のことでも、その従属節中にタ形 (過去形) が現れる ((2)b)。この点で、時制の一致というシステムを持つ英語などとは大きく異なっている。

なお(1)a や(2)b との比較から、(1)b や(2)a の従属節の形式も相対テンスとして働いているものと考えられるが、厳密には(1)b や(2)a の従属節の形式が相対テンスとして働いているのか絶対テンスとして働いているのかはわからない、ということに注意したい (この点は後で再び問題にする)。

さて、アルタイ諸言語では、一般に形動詞と呼ばれる形式が広い機能を持ち、名詞的な機能や連体的な機能で用いられるばかりでなく、文末述語としても用いられることがある。そしてこれらの形動詞はテンス (もしくはアスペクト) に関して対立・分化している。名詞的に用いられる場合には与格などをもって時を示す副詞節を形成することもできる。したがってアルタイ諸言語においても、上記の日本語の例文とよく似た表現を形成することができる。本稿ではこのような構造、ならびにそれに類似した構造を広く取り扱うことにする。

¹ 日本語学での取り扱いなどを参考にし、「～する／した時に」のような節を時間節もしくは時を示す従属節と呼んで取り扱うこととする。むろん、別の目的を目指す研究では、「時」にかかる連体修飾節と分析することも可能である。

では日本語およびアルタイ諸言語の形動詞による時の表現はどこまで類似しているのだろうか？ アルタイ諸言語もみな日本語と同じように相対テンスのシステムを示すのだろうか？ そのシステムはどこが似ていてどこが違うのだろうか？ 本稿はこのような問題について考察する。対照するアルタイ諸言語として本稿で取り上げるのは、トルコ語（チュルク諸語）、モンゴル語（モンゴル諸語）、ナーナイ語（ツングース諸語）、の3つである。

1. 日本語

日本語ではすでに述べたように、連体形と終止形のいずれにもル形（非過去形）とタ形（過去形）の対立がある。進行や結果状態を示すのに、さらにシテ イ-ル形、シテ イ-タ形が用いられる。

本節では、日本語の相対テンスについて書かれた先行研究を検討し、日本語において相対テンスが生じる状況を明らかにしておくとともに、他の言語を調査する際の問題点を整理する。

1.1. 「過去の文に現れる非過去形」と「非過去の文に現れる過去形」の非対称性

先行研究は、主節が現在もしくは未来の文における時の従属節内には、タ形が用いられ得るとしている。しかしこの指摘は疑わしいものと考ええる。

日本語記述文法研究会編（2007: 186）では、未実現の事態の中でタ形が相対テンスとして働く例があるとして、次のようなものをあげている。

お客さんが来たから急いで掃除するというのではだめだよ

「～というのではだめだ」という形式に接続している文であるが、この文は未実現の事態についての注意を行っているとも解釈できる。この解釈では、「～から」節内の過去形は過去の事態を表しているのではなく、従属節の事態（「お客さんが来た」）が主文の事態（「急いで掃除する」）に先行していることを表している。

しかしこの文は一般論を述べる仮定の文であって、現実には生起する具体的なできごと（アクチュアルなできごと）について述べたものではない。それは「お客さんが来たら急いで掃除するというのではだめだよ」のように条件文に言い換えても意味がほとんど変わらないことからわかる。他方、「*これからお客さんが来たから、掃除するよ」は非文である。

次のような文も、いつだかわからない不定時の未来に行われるニュアンスを持っており、条件文的に解釈される（筆者の内省による²⁾）。

²⁾ 筆者の内省判断に関しては、発表時にコメントをいただき、査読者からもいくつかコメントをいただいた。すなわち、(3)aの文は、もうロシアに行くことが決まっている人が／に言ってもおかしくないという内省判断ができるというコメントである。(3)cの対比のニュアンスに関しても、「(いつでもいいけど、たまたま来月行くならその時に) 帽子を買って来てね」というような意味での解釈であるとのコメントをいただいた。(4)cの文に関しても、格助詞「に」が一文中に重複して現れていることが、この文の容認度を下げているというコメントをいただいた。やはり内省判断による研究には個人差が生じるものであり、「非対称性」の仮説を提案する筆者の根拠はまだかなり不十分なものと言わねばならない。今後は仮説そのも

- (3)a ロシアに行った時に帽子を {買う／買え}
(4)a 名前を書いた時にその紙を持って来ててください

具体的に近未来の時を指定した場合には、次のような継起や条件の文にしたほうがより自然に感じられる。

- (3)b 来月 {ロシアに行ってから／ロシアに行ったら} 帽子を {買う／買え}
(4)b 5分後に {名前を書いてから／名前を書いたら} その紙を持って来ててください

個人差はあるかもしれないが、筆者には次のような文はやや不自然に感じられる。

- (3)c 来月ロシアに行った時に帽子を {買う／買え}
(4)c 5分後に名前を書いた時にその紙を持って来ててください

(3)c では、「(他の時でなく) 来月ロシアに行った時に」といった、対比のニュアンスが強く出てしまう。

このような観察から、「過去の文に現れる非過去形」がより自然に生じるのに対し、「非過去の文に現れる過去形」の出現はより限定されているように感じられる。

以下で他の言語を調査する際には、こうした**非対称性**が観察されないかどうかにも注目することとする。

1.2. 従属節のタイプによる違い

まず、独立性の弱い接続形式は、主節と従属節の時間的關係のみを示す。文全体のテンスは文末述語の形式によって決定される。以下の例では、テンスのスコープの及ぶ範囲を [] を用いて示すこととする。このような独立性の弱い接続形式は、いかなる意味でのテンスも持っていないものと考えられる。このように文末のテンスが複文であっても文全体に及ぶことは、アルタイ型言語における一般的な性質であると考えられる。

- (5) [私はテレビを見ながら晩御飯を食べ] た
(6) [私はこれから晩御飯を食べてでかけ] る

これに対し、独立性の強い従属節のテンスは発話時を基準にして決まる場合がある（絶対テンス）。

- (7) [昨日はうまくでき] たけど、[明日はうまくでき] るかなあ？

他方、主節に対する従属節の時間的な前後関係があらかじめ限定されているような従属節では、一つのテンス形式しか使えないということが起こる。これらの文は相対的なテンスを示しているものとも考えることができる。

- (8) 日本に {来る／*来た} 前、日本語を勉強した
[文全体は過去を示しているが、従属節には非過去形が現れている]

のについて見直すことを含め、仮説の根拠についてコーパスその他から客観的なデータを得るなどの検証を行っていきたいと考えている。その際には、日本語以外の言語での状況も参考にしたいと考えている。

(9) 日本に {*行く／行った} 後、日本語を勉強するつもりです

[文全体は未来を示しているが、従属節には過去形が現れている]

ノデ節、ノニ節、ナラ節および連体修飾節に限ってはいるが、岩崎 (2001) はこれらの従属節が絶対テンスと相対テンスのいずれに解釈されるかを検討し整理している。以下ノデ節の例文とその説明を中心に、岩崎 (2001) の内容を要約して示す。

今回の学会に行くので、その次の学会は行かない (ル-ル：絶対テンス)

*今回の学会に行ったので、その次の学会は行かない (タ-ル：絶対テンス)

今回の学会に行ったなら、その次の学会も行く (タ-ル：相対テンス)

友人が遊びに来るので、前の日に部屋の掃除をした (ル-タ：相対テンス)

(ただし、従属節内の「友人が遊びに来る」という事態は、予定としてすでに確定していることであり、この文の意味はいわば「友人が遊びに来ることになっていたので、前の日に掃除をした」と同義である)

*友人が遊びに来たので、前の日に部屋の掃除をした (タ-タ：従属節事態後続、つまり相対テンスの解釈は不可)

連体修飾では相対テンスを示すことが可能である。

福井交通の運転手が越前海岸で自殺した女性をそこまで車に乗せて行ったらしい (三原 (1992) より、乗せて行った>自殺した)

英語の試験がトップだった人を採用しよう (三原 (1992) より)

[従属節…タ形／主節…ル形] の場合、ノデ節とノニ節の従属節内のタ形は相対的テンスを表せないが、ナラ節では表し得る。この違いは因果関係の結びつきにおいて、ノデ節、ノニ節が事実的であり、ナラ節が仮定的であることの違いによると考えられる。事実的であるがゆえに、従属節のタ形は発話時過去の意味と容易に結びついてしまい、絶対的なテンスとして解釈されてしまう。

以上のように、日本語における相対テンスの現れは、節の種類によってさまざまに異なり、複雑な様相を呈していることがわかる。

まず連体修飾節では、文脈や前後の要素にもよるが、相対テンスは成立しやすいことがわかる。1.1. でみた非対称性があるにもかかわらず、上記の例にみるように、全体が未来を示す文中にもタ形が成立する。連体修飾形では動詞的な性質の一部が失われ、機能的に形容詞に近い働きをするようになることがその一因であると考えられる。次に条件節でも相対テンスが成立しやすいが、条件となればそれは仮定の話であり、モーダルやエヴィデンシャルな要因の影響を考慮しなければならない。したがって本稿ではひとまず条件文は取り扱わないこととする。最後に、ノデ節、ノニ節は事実的であるために、相対テンスは成立しにくい。

本稿では、「～ {する／した} 時に」のように同時を表わす時間節と、理由節、連体修飾

節の3つを中心に、他の言語における相対テンスの現れを見ていくことにする。

1.3. 動詞のアスペクトによる相違（瞬間動詞 vs. 継続動詞）

従属節の動詞のアスペクト的性格も、相対テンスの成立不成立に影響を与えることが指摘されている。

以下、日本語記述文法研究会編（2007: 193）の記述を要約する。

「～時に」節内の述語が瞬間動詞の場合は、従属節中のタ形は相対テンスで解釈される。

アメリカに行ったとき、ガイドブックとスーツケースを買った

[文全体は過去、従属節中には過去形]

他方、「～時に」節内の述語が動作過程をもつ動詞の場合には、タ形は発話時を基準とした過去を示す、つまり絶対テンスの文となる。

掃除をした時に、探していた部屋の鍵が出て来た

新聞を読んだ時、友人の写真を見つけた

この場合、「～時に」節内のタ形は、「その動作の最中に」といった同時的な意味を示す。

すなわち、「その動作の最中に」という同時的な意味となり、しかも主節のテンスは過去であるので、「～時に」節内のタ形が示す動作も自動的に過去の事になるのである。絶対テンスを示していることは、全体を未来にした場合に文の適格性が落ちることからも判断できる。なおやはり条件文にすればその不自然さは回避される。

(10)a ??明日掃除をした時に、部屋の鍵を見つけるだろう

（予言者か催眠術師のセリフのようになってしまう）

(10)b 明日掃除をしたら部屋の鍵を見つけるだろう

岩崎（2001: 51）には次のような記述がある。

理由の従属節では相対テンスも絶対テンスも現れる場合がある。

授業中、花子が寝ているので、起こしてあげた（（シテイ）ル-タ：相対テンス）

授業中、花子が寝ていたので、起こしてあげた（（シテイ）タ-タ：絶対テンス）

これはやはり動作過程を持つ動詞の場合に起こることと考えられるが、本稿で主に問題にする「～時に」節でも同様であると思われる。

(11) 掃除をしてい {る／た} 時に失くしていた鍵を見つけた

(12) 新聞を読んでい {る／た} 時に友人の写真を見つけた

この場合に動詞がやはりテイル形になっていることに注意する必要がある。理由節でも時間節でも、従属節の行為がテイル形によって継続的な時間の幅を持って来れば、主節の動詞が瞬間的な行為でも相対・絶対の両方が成立する（すなわち「中和（3.1.で後述）」が起こる）ものと考えられる。

以上、従属節の動詞のアスペクトが相対テンスの成立に関わっていることを見た。

本稿では、瞬間動詞と継続動詞（上記の先行研究が「動作過程をもつ動詞」と呼んでいるものを、ひとまずこう呼ぶことにする）の違いにも注目しつつ、他の言語における相対テンスの現れを見て行くこととする。

2. トルコ語

トルコ語には次のような形動詞があり、連体的、さらには名詞的な機能で用いられる。

表 1: トルコ語の形動詞

汎用形*	-(y)en ^{/2}	名詞的機能もある、底の名詞は基底の主語のみ、テンス的には広い機能
過去形*	-dik ^{/4} /-tik ^{/4}	名詞的機能もある、底の名詞は主語以外
未来形	-(y)ecek ^{/2}	名詞的機能も（文末での）述語的機能もある、底の名詞は主語以外
完了形	-miş ^{/4}	名詞的機能も（文末での）述語的機能もある、底の名詞は主語のみ、従属節での使用はやや限定されている、述語的機能では間接体験過去を示す
中立形 （アリスト）	-er ^{/2} /-ir ^{/4} /-r	連体的機能と（文末での）述語的機能がある、底の名詞は基底の主語のみ、使用はさらに限定されている、述語的機能では習慣などを示す

なお *は暫定的な名称である。このうち太線枠内の形動詞が副詞的従属節内で広く使われる形式である。底の名詞が基底の主語以外の場合には、過去形と未来形が連合的な対立による体系をなしている。^{/x}は母音調和による異形態の数を示す（以下、他の言語でも）。

ここで、述語的にのみ用いられる形を「定動詞」と呼ぶことにする。するとこの「定動詞」には下記のものがある（命令法など、モダリティ的に有標な意味のものを除く）。

-iyor-^{/4} 現在進行中の動作を示す

-di^{/4} 直接体験の過去を示す

トルコ語の従属節のテンスに関しては、Göksel and Kerslake (2005: 470-473) などに記述があるが、ここでは筆者の行った調査に基づく観察を中心に述べる。コンサルタントは 1988 年 çeşme 生まれの男性で、日本語の知識も深い方である。

2.1. （瞬間動詞による）時間節にみられる相対テンス

まず、瞬間動詞による時の従属節のテンスの場合には、相対テンスが観察される。主節と従属節の時間的な前後関係に応じて、3つの形動詞が使い分けられる。なお Göksel and Kerslake (2005: 471)は、主節のできごとに先行する際には -mış-ken が用いられるとしている

(A converb in which *-(y)ken* is suffixed to the perfective marker *-miş* expresses a situation that is/was completed prior to the time referred to by the superordinate clause)。

- (13)a tam da ev-den çık-acak-ken misafir gel-di.
just EMP house-ABL go.out-PTCP.FUT-CVB.SIM guest come-DIRPST
「(ちょうど) 家を出ようとしていた時にお客が来た」
- (13)b tam da ev-den çık-ar-ken misafir gel-di.
just EMP house-ABL go.out-PTCP.AOR-CVB.SIM guest come-DIRPST
「(ちょうど) 家を出る時にお客が来た」
- (13)c tam da ev-den çık-mış-ken misafir gel-di.
just EMP house-ABL go.out-PTCP.PERF-CVB.SIM guest come-DIRPST
「ちょうど家から出た時にお客が来た」
(ドアからは少し離れたが、まだ庭や玄関のあたりにいるうちにお客が来たような場合)

ただ、定動詞としてのみ用いられる *-iyor*⁴ も *-(y)ken* の前の位置に用いられるという。したがって *-(y)ken* の前の位置は形動詞のみが現れる位置であるのかどうかについては疑問が残る。なお歴史的にみると、*-(y)ken* は **-i-ken* に遡り、その要素 *-i* はコピュラであった。*-(y)ken* は名詞にもつき、やはり「～の時」のような意味を示す (*çocuk-ken* child-CVB.SIM 「子供の時に」)。

なお、コンサルタントによれば、さらに次のような表現も用いられるという。接続詞の *ki* はペルシャ語起源である。

- (13)d tam da ev-den çık-ıyor-du-m ki misafir gel-di.
just EMP house-ABL go.out-PROG-PST-1SG CONJ guest come-DIRPST
「(ちょうど) 家を出る時にお客が来た」
- (13)e tam da ev-den çık-tı-m ki misafir gel-di.
just EMP house-ABL go.out-PTCP.PST-1SG CONJ guest come-DIRPST
「ちょうど家から出た時にお客が来た」

2.2. 非対称性と従属節のタイプによる違い

-miş-ken は下記の例に見るように、非対称性を問題にせず、全体が未来を示す文中にも起こり得る。さらに、先に見たように、「家を出たこと」と「お客が来たこと」の間に何の因果関係もない場合がある一方、下記の例のように因果関係がある場合もある。また願望や勧誘、意志など、未来の表現でも用いられ、相対テンスを示すことができる。

- (14)a Ankara-ya gel-miş-ken seni de gör-mek iste-r-im.
Ankara-DAT come-PTCP.PERF-CVB.SIM thou.ACC CML see-INF want-PTCP.AOR-1SG
「アンカラへ {行くから／行くついでに} 君にも会いたい」(願望、まだアンカラに到着していない時点でも、行くことが文脈上明確であれば、この文は用いられる)

- (15)a toplantı İstanbul'da ol-acak. git-miş-ken
 meeting Istanbul-LOC become-PTCP.FUT go-PTCP.PERF-CVB.SIM
 Ayasofya-'yı da gör-elim.
 Ayasofya-ACC CML see-OPT.1PL

「会議がイスタンブールで開かれる。行ったら（行くので）アヤソフィアも見よう」（勧誘、イスタンブールに行く前の発話）

副動詞 *-ince*⁴ は因果関係のある時に用いられる副動詞で、異主語を許容するが、上記の文はこれによって言い換えることができるという。したがってこのことから因果関係を含んでいるといえることができる。

- (14)b Ankara'ya gel-ince seni de gör-mek iste-r-im.
 Ankara-DAT come-CVB PURP you.ACC CML see-INF want-PTCP.AOR-1SG
- (15)b toplantı İstanbul'da ol-acak.
 meeting Istanbul-LOC become-PTCP.FUT
 gid-ince Ayasofya-'yı da gör-elim.
 go-CVB.PURP Ayasofya-ACC CML see-OPT.1PL

ただし、前件と後件の行為の間にさらに必然的なつながりがある場合、たとえば後件の行為に対して前件の行為はその前提であり、後件は前件の目的であるような場合には *-miş-ken* は使えないという。*-miş-ken* はしたがって「～したついでに、～してしまったので」などと訳されることが多いという。

- (16) üniversite-ye { gir-ince / gir-dik-ten sonra / *gir-miş-ken }
 university-DAT { enter-CVB / enter-PTCP.PST-ABL after / enter-PTCP.PERF-CVB.SIM }
 ders çalış-madan ol-maz.
 lesson study-NEG.CVB become-NEG.AOR
 「大学に入ったからには、勉強しなければいけない」

日本語に関する先行研究で指摘されていたように、理由節では事実性が高まるため、相対テンスが成立しにくくなるものと考えられる。

2.3. 動詞のアスペクトによる違い（瞬間動詞 vs. 継続動詞）

2.3.1. 時の従属節における継続動詞

トルコ語では、日本語とは異なり、動作過程のある「読む」のような動詞でも中立形+ *-ken* を用いて表現することができるという（日本語で「新聞を読む時に友人の写真を見た」では、二つの動作の同時性を示すことはできない）。ただし、テンスの解釈は、新聞を読み始めてから読み終わるまでの間のどこかで友人の写真を見たことになり、文全体は過去のできごとなので、従属節中のできごとやはり過去のできごととして絶対テンスの解釈を受ける。中立形は、文末で習慣などを示す形式であり、一定の幅のある時間を示すことができるためにこのような表現が可能なのだろう。他方、*-miş-ken* は使えないという。

- (17)a gazete-yi oku-**r-ken**
newspaper-ACC read-PTCP.AOR- CVB.SIM
gazete-de arkadaş-ım-ın resm-in-i gör-dü-m.
newspaper-LOC friend-1SG-GEN picture-3-ACC see-DIRPST-1SG
「新聞を読んでいた時に、私の友人の写真を見つけた」
- (17)b gazete-yi ok-**uyor-du-m** **ki**
newspaper-ACC read-PROG-PTCP.PST-1SG CONJ
gazete-de arkadaş-ım-ın resm-in-i gör-dü-m.
newspaper-LOC friend-1SG-GEN picture-3-ACC see-DIRPST-1SG
「新聞を読んでいた時に、私の友人の写真を見つけた」

さらに次のような例では、掃除をしている時間が全体としてひとまとまりに捉えられ、その最中のどこかの時点で、という意味になるので、過去進行形も使えないという。

- (18)a temizlik yap-**ar-ken**, kaybet-tiğ-im anahtar-ı bul-du-m.
cleaning do-PTCP.AOR- CVB.SIM lose-PTCP.PST-1SG key-ACC find-DIRPST-1SG
「掃除をしていた時に、失くしていた鍵を見つけた」
- (18)b?? temizlik yap-**ıyor-du-m** **ki**, kaybet-tiğ-im anahtar-ı buldum.
cleaning do-PROG-PTCP.PST-1SG CONJ lose-PTCP.PST-1SG key-ACC find-DIRPST-1SG
「掃除をしている最中に、失くしていた鍵を見つけた」

過去進行形が使えるのは、動作の過程の中での一時点に主節の動作が行われる時であるという。したがって、話者は「掃除をする」という行為に動作の過程を感じられない、ということになる。このような判断の違いを説明するためには、トルコ語の個々の動詞が持つ語彙的アスペクトについてもう少し良く調べて研究を進めて行く必要があると思われる。

2.3.2. 理由の従属節における瞬間動詞

理由の従属節における過去形は絶対テンスとなる。全体が未来の文における従属節の過去形は、絶対テンスとして解釈される。

- (19) arkadaş-ım ev-im-e gel-**diğ-in-den** temizlik yap-ayım.
friend-1SG house-1SG-DAT come-PTCP.PST-3-ABL cleaning do-OPT.1SG
「友達が家に来たので掃除をしよう」(友達はすでに家に来てしまっている)

他方、全体が過去を示す文であっても、理由の従属節中に未来の形動詞を用いることができる。したがって非対称性が観察される。

- (20) öğle-den sonra sınav-a çalış-**acağ-ım-dan**,
noon-ABL after exam-DAT study-PTCP.FUT-1SG-ABL
öğle yemeğ-im-i erken-den ye-di-m.
noon food-1SG-ACC early-ABL eat-DIRPST-1SG
「午後試験の勉強をするので、昼ご飯を早めに食べた」

ただこの文は、発話時点が昼食直後であれば絶対テンスを示しているという可能性も否定できない。その点に関してさらなる検討を必要とする。

2.3.3. 理由の従属節における継続動詞

日本語では、動作過程を持つ動詞の場合、理由の条件節では相対テンスが可能であった（授業中彼が寝ているので起こしてあげた）。しかしトルコ語では絶対テンスによって表現されるという。ただこの場合、日本語の文は進行形であるのに対し、トルコ語ではそうっていない。この点に関してはさらなる調査を必要とする。

- (21) o ders sıra-sın-da uyu-duğ-u için, onu uyan-dır-dı-m.
that lesson time-3-LOC sleep-PTCP.PST-3 for that.ACC awake-CAUS-DIRPST-1SG
「彼が授業中寝ていたなので彼を起こした」

2.3.4. 主節における継続動詞（時の従属節の場合）

Göksel and Kerslake (2005: 481)によれば、従属節が示している時に主節のできごとが進行中であるような場合（the situation described by the superordinate clause is/was ongoing at the time of the event expressed by the adverbial clause）には、処格による表現も可能であるという（例文も）。

- (22) uçak-tan in-diğ-imiz-de kar yağ-ıyor-du.
airplane-ABL get.off-PST-1PL-LOC snow fall-PROG-DIRPST
「我々が飛行機から降りた時に雪が降っていた」

なお未来形動詞＋人称＋処格、という連続も存在する。このように形動詞に格がついて時の副詞節を作るとは、形動詞の名詞的性格が強かった日本語の古文にも類似した構成のものを見ることができる。

コンサルタントによれば、この場合 *-mış-ken* は使えないという。

他方、上記のように進行中の動作でない場合には処格による表現は使えないようだ。

- (23) *tam da ev-den çık-tığ-ım-da misafir gel-di.
just EMP house-ABL go.out-PTCP.PST-1SG-LOC guest come-DIRPST
「ちょうど家から出た時にお客が来た」

2.4. 連体修飾節におけるテンス

連体修飾節において、相対テンスは主にコピュラ的な動詞 *ol-* 「なる」によって実現される。

まず、「(これから) 名前を書く紙」の場合は、未来形動詞があるのでこの未来形動詞（受け身）による連体修飾で表現できる。

- (24) ism-in yaz-ıl-acağ-ı kağıd-ı getir-in.
name-2SG write-PASS-PTCP.FUT-3 form-ACC bring-IMP.POLT
「名前を書く用紙を持って来なさい」

もしくはコンピュータ的な機能を持つ動詞 *ol-* を用いた連体修飾で表される。

- (25) isim yaz-**ıl-acak** ol-**an** kağıd-1 getir-in.
 name write-PASS-PTCP.FUT become-PTCP form-ACC bring-IMP.POLT
 「名前を（これから）書く紙を持って来なさい」

これを用いずに、単に動詞 *yaz-ıl-* 「書かれる」の連体修飾を使うと、「名前を書くための用紙」という意味になり、名前がすでに書いてあるのか、まだ書かれていないのかはわからないという。

- (26) isim yaz-**ıl-an** kağıd-1 getir-in.
 name write-PASS-PTCP form-ACC bring-IMP.POLT
 「名前を書く用紙を持って来なさい」

「名前を書いた紙」は、所有接辞 *-l^{/4}* によって表わされ、完了形動詞や過去形動詞は使用できないという。やはり動詞 *ol-* によってその時間的な違いが調整される。

- (27)a isim yazı-**lı** ol-**duğ-u** kağıd-1 getir-in.
 name writing-PROP become-PTCP.PST-3 form-ACC bring-IMP.POLT
 「名前を書いた紙を持って来なさい」
 (27)b *isim-i yazı-**dığ-ı** kağıd-1 getir-in.
 name-ACC writing-PTCP.PST-3 form-ACC bring-IMP.POLT
 「名前を書いた紙を持って来なさい」

3. モンゴル語

ここでいうモンゴル語とは、モンゴル国で主に行われているハルハ・モンゴル語をさすものとする。モンゴル語において使用頻度の高い形動詞は、次のようである。なお、「完了」形動詞とされている形式は、文末の述語として用いられる場合には過去のテンスを示す。

表 2: モンゴル語の形動詞

未来	-x	連体的、名詞的、述語的機能を持つ、述語としての用法はやや限定されている
習慣	-dag ^{/4}	連体的、名詞的、述語的機能を持つ
不完了	-aa ^{/4}	連体的、名詞的、述語的機能を持つ、述語としての用法はやや限定されている
完了	-san ^{/4}	連体的、名詞的、副動詞的、述語的機能を持つ

他方、定動詞には次のようなものがある。

- na^{/4} 未来形
 -v 主に疑問で用いられる過去形、文語的
 -laa^{/4} 直接体験近過去

モンゴル語の主要な文法書である Kullmann and Tserenpil (1996) には、従属節のテンスや相対テンスに関する記述は確認できない。モンゴル語の過去形に特化した先行研究には Binnick (2012) があるが、筆者未見である（なおこの文献の情報は梅谷博之氏より御教示いただいた、記して感謝申し上げる）。ここでは筆者調査による観察を中心に述べる。コンサルタントは 1988 年 övörxangaj 県 xajrxandulaan 郡生まれの女性である。

3.1. 時間節における相対テンス

日本語の「～した時に」にあたる表現（時間節）では、モンゴル語で「時」にあたる名詞は用いられず、形動詞に直接与格がつく。2.3.4. のトルコ語で見た構成と同様である。

しかしこの時、完了の形動詞形 (-san⁴) は用いられず、日本語の「{～した／～していた} (時) に」を直訳したような表現は作ることができない。このことは動詞の種類（瞬間動詞／継続動詞）に関わらない。

- (28)a oros jav-a-x üje-d-ee malgaj xudalda-ᠵ av-san.
Russia go-E-PTCP.FUT time-DAT-REF hat sell-CVB.SIM take-PTCP.PERF

「ロシアに行く時に帽子を買った」

(いつ帽子を買ったのかは明らかでない、すなわちそれが行く前でも、行く途中でも、行った後でもこの表現が使える)

- (28)b *oros jav-san üjed-ee malgaj xudalda-ᠵ av-san.
Russia go-PTCP.PERF time-DAT-REF hat sell-CVB.SIM take-PTCP.PERF

(「ロシアに行った時に帽子を買った」の意で使えないばかりでなく、そもそもこの文は全く用いられない)

- (29)a sonin unši-ᠵ baj-x-d-aa
newspaper read-CVB.SIM be-PTCP.FUT-DAT-REF
tan'-dag xün-ij-x-ee zurg-ijg xar-san.
recognize-PTCP.HAB person-GEN-NMLZ-REF picture-ACC see-PTCP.PERF

「私は新聞を読んでいる時に知人の写真を見た」

- (29)b *sonin unši-ᠵ baj-san-d-aa
newspaper read-CVB.SIM be-PTCP.PERF-DAT-REF
tan'-dag xün-ij-x-ee zurg-ijg xar-san.
recognize-PTCP.HAB person-GEN-NMLZ-REF picture-ACC see-PTCP.PERF

(やはりこの文自体が使用不可能である)

(28)a の () 内の記述にあるように、未来-x は主節のできごととの前後関係を示すこともできない。すなわち相対テンスにおける対立が存在しない。このような機能を示している場合、以下ではこれを相対テンスの対立の「中和」と呼ぶことにする。

非対称性の仮説から考えて、主節が未来の場合にはさらに完了形動詞は用いられにくいものと考えられる。調査してみるとやはり完了形動詞は用いられない。条件節であっても

なお完了形動詞は用いられない。

- (30) ulaanbaatar-t { oč-vol / oč-ood / *oč-**son**-d-oo
Ulan bator-DAT { reach-CVB.COND / reach-CVB.ANT / reach-**PTCP.PERF**-DAT-REF
/ ?? oč-**son** baj-val } čamtaj uulz-maar baj-na.
/ reach-**PTCP.PERF** be-CVB.COND } thou.COM meet-OPT be-PRS
「ウランバートルに行ったらおまえに会いたい」

ただし会うことがかなり確定的であり、もう着いてしまっている場合、つまり確定条件の場合には、条件形の中で完了形動詞を用いることが可能であるという。

- (31) ulaanbaatar-t { *oč-son-d-oo / oč-**son** baj-val }
Ulan bator-DAT { reach-**PTCP.PERF**-DAT-REF / reach-**PTCP.PERF** be-CVB.COND }
čamtaj uulz-na.
you.COM meet-PRS
「ウランバートルに着いたとなれば、おまえに会う」

時間を示す形式的な名詞 (üE 「時」) を用いても、完了形動詞を使うことは難しく、理解はできるが日本語からの直訳のような感じがするという。

- (32) bid nar-yg ongoon-oos
we PL-ACC airplane-ABL
{ buu-**x** üje-d / ??buu-**san** üje-d / *buu-**san**-d }
{ get.off-**PTCP.FUT** time-DAT / get.off-**PTCP.PERF** time-DAT / get.off-**PTCP.PERF**-DAT }
cas or-ĵ baj-san.
snow enter-CVB.SIM be-**PTCP.PERF**
「私たちが飛行機から降りた時、雪が降っていた」

他方で、完了の形動詞形 (-**san**⁴) に与格が連続した形式が用いられるのは、次のような場合である。すなわち、もはや一体となって時間表現を構成しているのではなく、「ありがとう」や「うれしく思う」などの述語が与格の補語を要求しているような場合である。この場合、主節の行為は現在のできごとで、従属節のできごとはいずれも過去のできごとである。したがって、相対テンスとして働いているのか、絶対テンスとして働いているのかわからない。上述したように動詞の補語であるので、そもそも時の表現ではないと考えられる。

- (33) minij ögüülel unš-**san**-d bajarla-laa.
I.GEN paper read-**PTCP.PERF**-DAT thank.PST
「私の論文を読んできたことに（対して）ありがとう」

- (34) bi japon-d sur-č baj-**san**-d-aa bajarla-dag.
I Japan-DAT learn-CVB.SIM be-**PTCP.PERF**-DAT-REF thank-**PTCP.HAB**
「私は日本で {学んでいた／学んだ} ことに（ついて）うれしく思っています」

一般論の条件の意味でならば、元来 2 人称の所有を示す形式であった *čín'* と共に完了形動詞が用いられるようだ。

- (35) *jaaral-taj nojl'-d or-son čín'*
 hurry-PROP toilet-DAT enter-PTCP.PERF POSS
nojł-ijn kaas baj-x-güj bol jaa-x ve?
 toilet-GEN paper be-PTCP.FUT-NEG if how.to.do-PTCP.FUT INTERR
 「急いでトイレに入って、トイレットペーパーがなかったらどうしますか？」
 (山越 2012: 206)

3.2. 理由節におけるテンス

3.2.1. 理由の従属節における瞬間動詞

理由の従属節の代わりに、完了形動詞が与格を伴って用いられることはない。

- (36)a **ix surguul'-d or-son-d-oo*
 big school-DAT enter-PTCP.PERF-DAT-REF
xičeel-ee xij-x xereg-tej.
 lesson-REF do-PTCP.FUT necessity-PROP
 「大学に入ったんだから、勉強しなければならない」

次に “...*učr-aas*” 「～（という）理由-から」を用いた理由の表現についてみると、ここでは未来と完了の両方の形動詞を用いることができるという。したがって日本語と同様の状況となっている。

- (36)b *ix surguul'-d { or-o-x učr-aas / or-son učr-aas }*
 big school-DAT { enter-E-PTCP.FUT reason-ABL / enter-PTCP.PERF-DAT-REF }
xičeel-ee xij-x xereg-tej.
 lesson-REF do-PTCP.FUT necessity-PROP
 「大学に入ったんだから、勉強しなければならない」

全体が過去の文であっても従属節には現在形が現れるので、その点では相対テンス的であるといえる。しかしこの場合、形動詞 *-x* は相対的なテンスに関しても中和した意味になっている可能性がある。

完了形動詞を用いた次の文は、発話時点ですでに友達が来たことが確定的であるため、絶対テンスを示しているものと考えられる。

- (37) *najz maan' ir-sen učr-aas ger-ee ceverle-sen.*
 friend POSS come-PTCP.PERF reason-ABL house-REF clean-PTCP.PERF
 「友達が来たので部屋を掃除した」(友達が来ていない時点での発話は不可能)

3.2.2. 理由の従属節における継続動詞

日本語では、次のような文で二通りの表現が可能であった。

授業中、彼が寝ているので、起こしてあげた
 授業中、彼が寝ていたので、起こしてあげた

モンゴル語の場合、すでに見てきたように従属節内でも完了形動詞は絶対テンス的に機能するので、この場合には完了形動詞のみが使用可能である。

- (38) xičeel deer ter {unt-aad / unt-a-ǰ} {baj-san / *baj-g-aa}
 lesson on (s)he {sleep-CVB.ANT / sleep-E-CVB.SIM} {be-PTCP.PERF / be-E-IMP}
 učr-aas, tüüinijg seree-sen.
 reason-ABL (s)he.ACC arouse-PTCP.PERF
 「授業中、彼（女）が寝ていたので、起こしてあげた」

3.3. 連体修飾節におけるテンス

「(これから) 名前を書く紙」はやはり未来形動詞による連体修飾で表現することができる。

- (39) ner-ee biči-x xuuds-yg av-aad ir.
 name-REF write-PTCP.FUT form-ACC take-CVB.ANT come.IMP
 「名前を書く紙を持って来てください」

しかし日本語の「名前を書いた紙を持って来てください」の場合、これから書く場合には完了の形動詞で連体修飾した表現は使えない。使えば、発話時点ですでに書き終わった紙を意味することになるという。つまりここでも文中に用いる完了の形動詞は絶対テンス的な性格を持っていることがわかる。

- (40) ner-ee bič-sen xuuds-yg av-aad ir.
 name-REF write-PTCP.PERF form-ACC take-ANT.PTCP come.IMP
 「(発話時点ですでに) 名前を書いた紙を持って来てください」
 (すでに家など別の場所で書き終わったその紙を持って来てください、という
 意味になるという)

日本語の「名前を書いた紙を持って来てください」にあたる表現は、「名前を書いてから(その紙を) 持って来てください」のように表現される。

- (41) ner-ee bič-sen-ij daraa, ter xuuds-aa av-aad ir.
 name-REF write-PTCP.PERF-ACC next that form-REF take-CVB.ANT come.IMP
 「名前を書いてから(その紙を) 持って来てください」

内モンゴルのモンゴル語ホルチン方言についても若干の調査を行ってみたが、その結果はハルハ方言から得られた上述の結果とほとんど変わらなかった(コンサルタントはチチハル市出身 40 代後半の女性である)。ただし唯一異なっていたのが、この連体修飾節における完了形動詞の働きである。ホルチン方言では、発話時点でまだ名前を書いていなくとも次のような発話が可能であるという。したがってこの方言では、連体修飾節の場合に限っ

て、完了形動詞による相対テンスの表示が可能であるということになる。

- (42) ner_e ben biči-gsen čagasu ban abugad ir_e.
 name REF write-PTCP.PERF paper REF take-CVB.ANT com.IMP
 「名前を書いた紙を持って来てください」

4. ナーナイ語

以下にナーナイ語で用いられる形動詞を示す。

表 3: ナーナイ語の形動詞

人称	非過去	-i/-rii/-dii (V-/VV-/C-)	連体的、名詞的、述語的機能を持つ
	過去	-xa(n) ^{/2} /-ki(n) (V-/C-)	連体的、名詞的、述語的機能を持つ
非人称	非過去	-ori ^{/2}	連体的、名詞的、述語的機能を持つ
	過去	-oxan ^{/2}	連体的、名詞的、述語的機能を持つ

他方で、次のような定動詞形が存在する。

- (r)a(n)^{/2}: 直説法現在
 -ka^{/2}/-ča^{/2}: 直説法過去
 -jaan^{/2}: 直説法未来

主要なナーナイ語の文法書である Avrorin (1959, 1961) には、主節と従属節のテンスや相対テンスに関連する記述は見いだせない。以下本稿では筆者の調査結果を述べる。なおコンサルタントは 1938 年ナイヒン村生まれの女性である。

4.1. 時の従属節における瞬間動詞のテンス

時の従属節における瞬間動詞の場合には、相対テンスのシステムが観察される。

- (43)a mii loča naa-či-a-ni ənə-i-du-ji,
 I russia earth-DIR-E-3SG go-PTCP.NONPST-DAT-REF.SG
 aapoŋ-go-ji ga-čim-bi.
 hat-DESIG-REF.SG buy-PTCP.PST-1SG
 「ロシアに行く時に帽子を買った」(行く前か、行く途中で買ったことを意味する)
- (43)b mii loča naa-či-a-ni ənə-xən-du-ji,
 I Russia earth-DIR-E-3SG go-PTCP.PST-DAT-REF.SG
 aapoŋ-go-ji ga-čim-bi.
 hat-DESIG-REF.SG buy-PTCP.PST-1SG
 「ロシアに行った時に帽子を買った」(到着後に買ったことを意味する)

ただし後者の文を訊いた際に、最初にコンサルタントが答えた文は次のように副動詞を用いたものであった。

- (43)c mii loča naa-či-a-ni {ji-pi / ji-mi},
 I Russia earth-DIR-E-3SG {come-CVB.COND.SG / come-CVB.SIM.SG}
 aapoŋ-go-ji ga-čim-bi.
 hat-DESIG-REF.SG buy-PTCP.PST-1SG
 「ロシアに {来てから／来て} 帽子を買った」

以下の例もやはり相対テンスとしての対立を示している。

- (44)a mii niə-gu-ji bargi-či-i-do-jija,
 I go.out-CVB.PURP-REF.SG get.ready-DUR-PTCP.NONPST-DAT-1SG
 andaxa ji-či-ni.
 guest come-PTCP.PST-3SG
 「私が出ようと準備している時に、お客が来た」
- (44)b mii joog-jaŋi niə-rii-du-jija, andaxa ji-či-ni.
 I house-ABL go.out-PTCP.NONPST-DAT-1SG guest come-PTCP.PST-3SG
 「私が家から出る時にお客が来た」
- (44)c mii joog-jaŋi niə-xən-du-jija, andaxa ji-či-ni.
 I house-ABL go.out-PTCP.PST-DAT-1SG guest come-PTCP.PST-3SG
 「私が家から出た時にお客が来た」(ドアからは少し離れたが、まだ庭や玄関のあたりにいるうちにお客が来たような場合)

4.2. 時の従属節における継続動詞のテンス

この場合、非過去形動詞と過去形動詞の両方を用いることができるという。このことは見方を変えれば、非過去形動詞においてモンゴル語で見たような相対テンスの対立の中和が起きているとみることができよう。

- (45) mii joog-bi {oosi-i-do-ji, / oosi-xan-do-ji},
 I house-REF.SG {clean-PTCP.NONPST-DAT-REF.SG / clean-PTCP.PST-DAT-REF.SG}
 xuədə-xən anako-wa bao-go-xam-bi.
 lose-PTCP.PST key-ACC find-REPET-PTCP.PST-1SG
 「私は部屋を掃除している時に失くしていた鍵を見つけた」
- (46) gazeta-wa {xola-i-do-ji, / xola-xan-do-ji},
 newspaper-ACC {read-PTCP.NONPST-DAT-REF.SG / read-PTCP.PST-DAT-REF.SG}
 jia-ji durum-be-ni ičə-xəm-bi.
 friend-REF.SG picture-ACC-3SG see-PTCP.PST-1SG
 「新聞を読んでいる時に、知人の写真を見つけた」

主節の動詞も継続動詞である場合にも、やはり両方の形式が可能であるという。

- (47) buə samolet-ǰiaǰi {niə-gu-i-du-puwə, / niə-**xən**-du-puwə,}
 we airplane-ABL {go.out-REPET-**PTCP.NONPST**-DAT-1PL / go.out-**PTCP.PST**-DAT-1PL}
 simata simana-xa-ni.
 snow fall-PTCP.PST.3SG
 「私たちが飛行機から降りた時に雪が降っていた」

名詞的に用いられて、対格をとった場合にも同じように両方の形が使用可能であるという。

- (48) mii leksija-do Andrijushka {ao-**rii**-wa-ni / ao-**xam**-ba-ni}
 I lecture-DAT Andrew {sleep-**PTCP.NONPST**-ACC-3SG / sleep-**PTCP.PST**-ACC-3SG}
 səru-xəm-bi.
 awake-PTCP.PST-1SG
 「私は授業中にアンドリューが寝ているのを起こした」

この場合、ナーナイ語では従属節の動詞を進行形にする必要はない。そもそもこの言語には日本語やモンゴル語のような構成の進行形は無く、非過去および過去の形動詞は進行の意も表し得る。したがって幅のある時間を表示することができるので、このような場合にも用いられるものと考えられる。

4.3. 「～する前に」、「～した後に」に対応する表現と相対テンスの非対称性

「～する前に」に対応する表現では、非過去形動詞が用いられる。

- (49)a mii sisan xəsə-wə-ni japonija-či ənə-i **ǰulǰə-lə-ni**
 I Japanese language-ACC-3SG Japan-DIR go-PTCP.NONPST **before-LOC-3SG**
 tačoči-xam-bi.
 learn-PTCP.PST-1SG
 「私は日本語を日本へ行く前に勉強した」

この場合には、たとえそのできごと自体が過去に起きたことであっても、過去形動詞は用いられない。つまり過去形動詞 -*xan*² は絶対テンスとしては働かない。

- (49)b *mii sisan xəsə-wə-ni japonija-či ənə-**xən** **ǰulǰə-lə-ni**
 I Japanese language-ACC-3SG Japan-DIR go-PTCP.PST **before-LOC-3SG**
 tačoči-xam-bi.
 learn-PTCP.PST-1SG

これに対し、「～した後に」に対応する表現では、非過去形動詞と過去形動詞の両方が用いられ得るという。すなわちここでも「(文全体が) 過去における非過去」と「(文全体が) 非過去における過去」の非対称性をみることができる。さらに、これは非過去形動詞における相対テンスの対立の中和とみることもできる。

- (50)a japonija-či {ənə-i / ənə-**xən**} xamia-la-ni
 Japan-DIR {go-PTCP.NONPST / go-PTCP.PST} after-LOC-3SG
 mii sisan xəsə-wə-ni tačioči-jaam-bi.
 I Japanese language-ACC-3SG learn-FNT.FUT.1SG
 「日本へ行った後で私は日本語を勉強するだろう」

ただしこの場合でも、コンサルタントがより自然であるとしたのは、次のような副動詞による文であった。

- (50)b mii murči-i-ji, japonija-či pulsi-**pi**
 I think-PTCP.NONPST.1SG Japan-DIR commute-CVB.COND
 sisan xəsə-wə-ni tačioči-ori-wa.
 Japan language-ACC-3SG learn-IMPERS.PTCP-ACC
 「私は考えている、日本へ行ってから、日本語を勉強しよう」と

4.4. 連体修飾節におけるテンス

連体修飾節では、相対テンスのように見える対立が観察される。

- (51)a gərbu-ji niru-i-si xaosam-ba gaažo-o.
 name-REF.SG write-PTCP.NONPST-2SG paper-ACC bring-IMP
 「自分の名前を書く紙を持って来い」
 (51)b gərbu-ji niru-**xəm**-bi xaosam-ba gaažo-o.
 name-REF.SG write-PTCP.PST-REF.SG paper-ACC bring-IMP
 「自分の名前を書いた紙を持って来い」
 (発話時に名前がすでに書かれているかは不明、書かれていても書かれていなくとも良い)

(51)b の説明にある通り、厳密に言えばこの文における -xan^{1/2} が相対テンスとして働いているのか、絶対テンスとして働いているのかは明確ではない。

なお、前者の例文 ((51)a) の調査でコンサルタントが最初に答えたのは、やはり次のような目的副動詞による文であった。

- (51)c xaosam-ba gaažo-o, gərbu-ji niru-**gu**-ji.
 paper-ACC bring-IMP name-REF.SG write-CVB.PURP -REF.SG
 「紙を持って来い、自分の名前を書くために」

5. 対照言語学的整理と結論

ここまでの調査結果と考察は以下のような表にまとめることができる。

表 4: 4 つの言語の従属節におけるテンスの対照

	アスペクト	形式	日本語	トルコ語	モンゴル語	ナーナイ語	例
時間節	瞬間	過去文中の非過去形／過去形	R	R	N	R	[1]
	継続	過去文中の非過去形／過去形	A / N	R	N	A / N	[2]
理由節	継続	過去文中の非過去形／過去形	A / N	A	A	A / N	[3]
連体修飾節		非過去中の非過去形／過去形	R	(R)	A*	(R)	[4]

*方言によっては、相対テンス的な解釈が可能である

略号 — R: 相対テンス, A: 絶対テンス, N: 中和

調査例文：

- [1] ロシアに行く時、帽子を買った／家を出る時、友だちが来た
- [2] 新聞を「読む／読んだ／読んでいた」時に知人の写真を見つけた
- [3] 私は授業中～が寝て「いる／いた」ので起こした
- [4] 名前を書いた紙を持って来てください（発話時点で名前は書かれていない）

以上のような調査結果から、最終的に本稿では次の(A)～(E)のような点を指摘する。

(A) 相対テンスの現れ方には「非対称性」がある。従属節の動詞における非過去形（もしくは未完了形、など）は、全体が過去時制の文でより現れやすいのに対して、過去形は現在もしくは未来時制の文に起こりにくい。もっぱら非過去形しか現れないという言語では、非過去形が相対テンスの観点からみれば中和した形として働くことになる。「非対称性」は通言語的な傾向である可能性がある。しかしこの仮説を証明するには今後より多くの言語について検証を行っていく必要がある。

(B) 相対テンスの現れ方は従属節の種類によって違いがある。相対テンスは同時を示す従属節（日本語でいういわゆる「時の従属節」、上記の(1)a, (1)b 参照）でもっとも現れやすい。ただし、いわゆるアルタイ型の言語では副動詞が発達しているため（主節と従属節の主語が異なるなどの条件がない限り）、日本語の「～した後で」、「～した時に」に対応する表現は副動詞によって表わされることが多い。他方、理由や逆接を示す条件節では、一般に相対テンスは現れにくい。これは、従属節中の命題が真であることが前提になっているためである。

連体修飾節では相対テンスがもっとも生じやすいものと考えたが、トルコ語やナーナイ語の結果を見ると必ずしもそうとは言い切れない面がある。日本語の例を見てもわかるように、連体修飾節の相対テンスに関する解釈は、文脈の諸条件に依存している面が大きいように感じられる。この点に関しても今後のさらなる研究を必要とする。

(C) 相対テンスの現れ方は、従属節（および主節）の動詞の語彙的なアスペクト的性格によ

って違いがある。特に瞬間動詞であるか継続動詞であるかの違いが重要になる。相対テンスは従属節の動詞が瞬間動詞である場合により現れやすい。これに対し、継続動詞の場合には、相対テンスによって示される対立が中和されやすい。

(D) 相対テンスは、アルタイ型の言語において生じやすいものとする。これは非アルタイ型の言語との十分な対照の上で検討しなければならないが、仮説として提示しておく。なぜなら、このタイプの言語では、文末述語のテンスのスコープが広く文全体に及ぶという特質を持っているためである。したがって文中の述語は主節の行為に対する時間的な前後関係を示せばよいということになる。副動詞はまさにこうした性質を持っている。形動詞＋与格などの構成で成立した副詞節も、こうした副動詞節等からの類推により、相対テンスの性格を強めて来た可能性がある。

(E) 今回の調査の結果、同じアルタイ型の言語であっても、相対テンスの現れやすさには違いがあることがわかった。特にモンゴル語では相対テンスがほとんど成立しないことがわかった。

以上に見てきたように、従属節が示す（絶対／相対）テンスの問題は、節の種類やアスペクト、時の副詞、文脈といった諸要素が複雑に働いた結果決定される。今回の調査も全ての組み合わせに関して十全な調査を行ったわけではない。今後は調査を精密化するとともにさらに他の言語についても検証を行っていく必要がある。

また本稿執筆後、朝鮮語との対照言語学的研究に金 (1999) のあることを知った（未見）。アルタイ型言語の一つとして、朝鮮語での状況にも注意を払う必要があると考えている。

謝辞

本稿の内容は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で行われた「北方諸言語の類型論的比較研究」（研究代表者 呉人徳司氏）の研究会で、二度に亘って発表させていただいた。席上、参加者から有益なコメントをいただいた。本誌の二人の査読者の方からも重要な御指摘や有益なコメントをいただいた。筆者の力不足から、十分に修正・改善できたとは言えないが、推敲に際してたいへん参考になった。ここに記して御礼申し述べる。

略号一覧

ABL: ablative	INDIRPST: indirect evidential past
ACC: accusative	INF: infinitive
ADVS: adversative	INTERR: interrogative
ADVF: adverbial verb form	LOC: locative
ANF: adnominal verb form	NEG: negative
ANT: anterior	NOMLZ: nominalizer
AOR: aorist	NOM: nominative
CAUS: causative	NONPST: nonpast
COM: comitative	OPT: optative
CONJ: conjunction	PASS: passive
CML: cumulative	PL: plural
COND: conditional	POLT: polite
COP: copula	POSS: possession
CVB: converb	PERF: perfect
DAT: dative	PROG: progressive
DESIG: designative (case)	PROP: proprietive
DIR: directive	PRS: present
DIRPST: direct evidential past	PST: past
DUR: durative	PTCP: participle
E: epenthetic vowel/consonant	PURP: purposive
EMP: emphatic	REF: reflexive
FNT: finite	REPET: repetitive-reversive aspect
FUT: future	SG: singular
GEN: genitive	SIM: simultaneous
HAB: habitual	TOP: topic
IMP: imperative	= : clitic boundary
IMPERS: impersonal	# : word boundary in compounds

参考文献

- Avrorin, V. A. (1959) *Grammatika nanajnskogo jazyka* 1, Leningrad: Izd. AN SSSR.
- Avrorin, V. A. (1961) *Grammatika nanajnskogo jazyka* 2, Leningrad: Izd. AN SSSR.
- Binnick, R. I. (2012) *The past tenses of the Mongolian verb: meaning and use*. Empirical approaches to linguistic theory; 1. Leiden: Brill.
- Göksel, A. and C. Kerslake (2005) *Turkish. A Comprehensive Grammar*. London: Routledge.
- 岩崎卓 (2001) 「複文における時制」『月刊言語』 vol. 30, No.13. 50-55
- 金玉英 (1999) 『日本語と韓国語の従属節および関係節のテンス・アスペクトの研究』筑波大学博士学位論文
- Kullmann, R. and D. Tserenpil (1996) *Mongolian Grammar*. Hong Kong: Jenco Ltd.

- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』 東京：くろしお出版
 日本語記述文法研究会編 (2007) 『現代日本語文法 3 第5部 アスペクト 第6部 テンス 第7部 肯否』 東京：くろしお出版
 山越康裕 (2012) 『詳しくわかるモンゴル語文法』 東京：白水社

Relative Tense from a Contrastive Linguistics Viewpoint:
 An Analysis of Subordinate Clauses Using Participles in Japanese and Altaic Languages

Shinjiro KAZAMA
 (Tokyo University of Foreign Studies)

In Japanese both the finite form and the adnominal form of verbs are realized in the same way. The two finite forms, nonpast: *-(r)u* and past: *-(i)ta*, can also be used to express time in subordinate clauses.

However in subordinate clauses these two forms do not exhibit tense based on the time of a utterance (absolute tense), but rather they show the temporal relationship of the subordinate clause relative to the main clause (**relative tense**).

- (1)a *rosia=ni ik-u toki=ni boosi=o kat-ta.*
 Russia=DAT go-ANF.NONPST time=DAT hat=ACC buy-FNT.PST
 “When I went to Russia, I bought a hat (beforehand).”
 [Sentence as whole is past, subordinate clause is nonpast]
- (1)b *rosia=ni it-ta toki=ni boosi=o kat-ta.*
 Russia=DAT go-ANF.PST time=DAT hat=ACC buy-FNT.PST
 “When I went to Russia, I bought a hat (after arriving).”
 [Sentence as whole is past, subordinate clause is past]
- (2)a *namae=o kak-u kami=o mot-te ki-te kudasai.*
 name=ACC write=ANF.NONPST paper=ACC take-ADVF come-ADVF please
 “Please bring the piece of paper on which you will write your name.”
 [Sentence as whole is future, adnominal clause is nonpast]
- (2)b *namae=o ka-ita kami=o mot-te ki-te kudasai.*
 name=ACC write=ANF.PST paper=ACC take-ADVF come-ADVF please
 “Please bring the piece of paper with your name written on it.”
 [Sentence as whole is future, adnominal clause is past]

As seen above, irrespective of the fact that the event occurred in the past, the *-(r)u* (nonpast) appears in the subordinate clause ((1)a). Also, irrespective of the fact that

the event has yet to occur, we see the *-(i)ta* (past) appearing in the subordinate clause ((2)b).

In Altaic languages, the participle has a wide range of function: in addition to functioning both nominally and adnominally, it may also function as a sentence final predicate. When used nominally, participles take case (such as dative) directly and can be used to create adverbial phrases. Thus, in Altaic languages also, it may be possible to create expressions of **relative tense** similar to that of Japanese.

So, what is the extent of similarity among Altaic-type languages (including Japanese) in this respect?

Results of investigation are summarized in the following table.

Table 1 : Comparison of tense of subordinate clauses
(R: Relative tense, A: Absolute tense, N: Neutralized)

	Aspect	Form	Jap.	Turk.	Khalkha	Nanai	ex.
Temporal C.	Momentary	nonpst in pst	R	R	N	R	[1]
	Durative	pst in pst	A	R	N	A / N	[2]
Causal C.	Durative	nonpst/pst in pst	A / N	A	A	A / N	[3]
Adnominal C.		pst in nonpst	R	(R)	A	(R)	[4]

(In the following sentences, English is a kind of meta-language.)

[1] When I *go* to Russia, I *bought* a hat.

[2] When I *read/was reading* the newspaper, I *found* a picture of my friend.

[3] X *is/was* sleeping during the lesson, so I *woke* him/her up.

[4] Please *bring* the piece of paper with your name *written* on it.

In this paper, I would like to maintain the following points:

(A) The realization of the relative tense shows **asymmetry**. The nonpast (or imperfect or like that) verb form in the subordinate clause tends to occur in the past sentence more often, but the past form in the present or future sentence harder to occur.

(B) The relative tense is realized differently by **the kind of adverbial clauses**; such as, “when” clause (temporal (simultaneous) clause), “because” clause (causal clause), “though” clause (adversative clause) and “if” clause (conditional clause).

The relative tense is realized mostly in the **simultaneous** clause, because the temporal relationship (before or after) is important in this type of sentence. But the meaning of “after” clause and “when” clause are more often realized by **converbs** in the Altaic-type languages. On the other hand, the relative tense tend not to be realized in **causal or adversative** clause, because in these clauses state truths.

(C) The relative tense is realized differently along the **aspect** of the verbs of the subordinate clause (and that of the main clause). The difference between **momentary** action and **durative** action influences the realization of the relative tense. The relative

tense is realized more in the case of momentary verbs. On the other hand the tense opposition tends to be neutralized in the case of durative verbs.

(D) The relative tense occurs **more in the Altaic-type languages** than the languages of other types. Because in the Altaic-type languages converbs (or adverbial forms or like that) are often used and the tense of **the sentence-final predicates have the scope over the whole sentence**. On the other hand the predicate in the middle of a sentence tends to express only the temporal (before or after) relationship to the tense of the sentence-final predicate.

(E) Furthermore, the realization of the relative tense differs among the Altaic-type languages.

(かざま・しんじろう kazamas@tufs.ac.jp)